

所報

No.144
令和6年10月16日

富山県総合教育センター 富山市高田525

E-mail: center@tym.ed.jp (代表)
URL: https://www.center.tym.ed.jp

目次

- 研修風景、センターNews …………… 1
- 各部の研修より …………… 2～4
- 特別寄稿（坪池研修顧問）…………… 5
今、「教育の現代化運動」に学ぶこと
- 随想（北田教育相談部長）…………… 5
「聞書」
- 連載「知って得06」…………… 6

ひたむきにスキルアップ

—研修風景—

教育研修部



初任教頭研修会（小・中・高・特）
「組織マネジメントに関するグループワーク」



新採研（養護教諭）
「心肺蘇生及びAEDを用いた実習」

科学情報部



理科教育講座（自然観察 中級コース）
「川原の石の観察（庄川上流）」



授業におけるICT活用研修会（生成AIコース）
「満員御礼！生成AIの可能性を体感」

教育相談部



学校カウンセリング講座（子供が見える事例検討コース）
演習「『気になる子』の情報を集め、本人の心情を想像し見立て、事例検討をする」



特別支援教育講座（基礎から学ぶ自立活動実践コース）
講義「自立活動って?! ～『自立活動』はじめてのいっぽ～」

センターNews 今年度の生徒海外派遣事業はベトナム、シンガポール、マレーシアへ！

第42回富山県高等学校生徒海外派遣事業は「ベトナム、シンガポール、マレーシアと富山県の特長的な発展—未来を切り拓くグローバル・リーダーの育成—」を研修テーマとし、3月10日から12日間の予定で行われます。先ごろ各高等学校等に派遣団員を募集し、20名の団員が決定しました。

第1回事前研修会開講式が9月25日、当センターで行われました。団員決定通知書を当センター所長から受け取った団員は、決意も新たに研修会に臨んでいました。今後は計8回の事前事後研修を受けることになっています。



各部の研修より

教育研修部

受け入れてもらえる「安心」が人と人をつなぐ 初任者研修会・新規採用教員研修会「チーム育成力向上研修」

- ◆日時 令和6年7月30日(火)
- ◆講師 公益財団法人 富山県健康づくり財団 富山県国際健康プラザ
事業推進課 指導員(プロジェクトアドベンチャーファシリテーター) 三浦 航兵
- ◆内容

人間関係づくりは集団をチームとして育成していく基礎です。どのようなかわりか関係づくりにつながるのか体験を通して理解を深めるとともに、教員としての実践的指導力を高めることを趣旨として、全校種の初任者を対象に研修を行いました。

研修では、互いに協力しながらアクティビティの楽しみを受講者が感じ合う中で、受け入れてもらえる安心感が人と人のかかわろうとする気持ちを育み、人とのつながりを生むことを体感しました。また、指導者として留意する点について説明を受け、受講者は児童生徒と教師の双方の視点から人間関係づくりの大切さを実感し、今後の実践への意欲を高めていました。



ターゲットの背中にタッチせよ！



みんなで立てるかな？

受講者の声

- ◎人間関係づくりは心理的な安心が担保されてこそ促進されると感じました。教師は、子供が自分らしく思い切り取り組むことができるよう、自身の気持ちも伝えながら子供と信頼関係を築き、安心感を与えられるようなファシリテーターとならなければならないと思いました。
- ◎様々なアクティビティを取り入れる場合でも、子供同士の実態や子供と教師の関係性を生かしながら、段階的に進めていくことの大切さが分かり、教科の学習とも通じるのではないかと思いました。毎日の教科指導においても意識していきたいです。

外国にルーツをもつ 児童生徒への支援を学ぶ 外国人児童生徒教育実践講座

- ◆日時 令和6年7月26日(金)
- ◆講師 東京学芸大学教育学部
准教授 原 瑞穂
- ◆演題 「日本語指導の現状と今後について」
- ◆内容

外国にルーツをもつ児童生徒に対して、生活場面と学習場面での言語能力をつなぐことを意識し、児童生徒の母語を大切にしつつ、日本語の能力を伸ばしていくために以下の3点について講義をしていただきました。

- ・日本語指導の種類や内容について
- ・在留外国人が増加している現状について
- ・子供を支える環境づくりについて

受講者の声

- ◎理論に裏付けされた具体的な指導方法や支援がたくさん提示され、分かりやすかった。現場で幅を広げて指導していける道筋がイメージできた。
- ◎日本語指導教員のサポート体制や、外国籍児童への合理的配慮の具体例をもっと知りたい。

異業種の研修の学びを生かす 中堅教諭等資質向上研修「社会体験研修」 (高・特教諭)

この夏、「社会体験研修」が予定された事業所の約半数で終了しました。この研修の目的は、異業種の研修を通して、対人関係能力の向上、視野拡大等の成果を挙げることです。各事業所には、校種に合った研修内容の準備等、ご協力をいただきました。今後、教師としての職務を果たす上で、また、学校のあるべき姿を考える上で大切な学びを得る機会となりました。(期間 7月から11月)

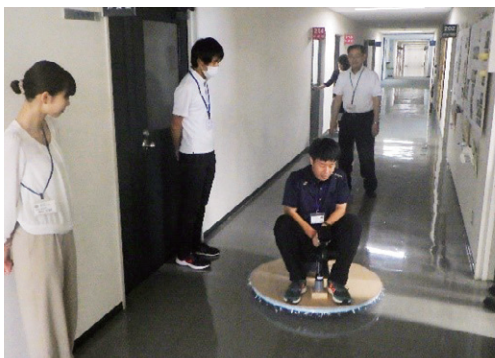
受講者の声

- ◎専門分野に親しみながら、利用者が一生懸命になることのできる体験をしてもらえるよう努めた。利用者の興味・関心に沿った学習を設計し、ねらいに向かうプロセスを見守ることが大切である。児童生徒や若手教諭に示せる多くの経験や知識を身に付けることの必要性を感じた。〈科学・文化施設〉
- ◎自然や水を守るために、毎日24時間体制で機械と人の目で点検する。1つの作業を怠ると多くの人の生活に影響を及ぼす責任の重い仕事だ。〈環境保全体験〉



やっぱり理科は面白い！ ～教えたくなる『とっておきのワザ』大放し～ 理科教育講座

- ◆日時 令和6年7月25日(木)～26日(金)
- ◆講師 富山県総合教育センター 科学情報部 理科教育室スタッフ
- ◆受講者 小学校および特別支援学校より8名参加
- ◆内容 2日間で4領域(エネルギー、物質、生命、地球)を実施



【ホバークラフト試乗体験】
空気ので浮いて滑る感覚にワクワク



【バーチャル噴火を動画撮影】
噴火する火山の臨場感にドキドキ

受講者の声

- ◎実験の方法について悩みがあり受講しました。研修で学んだことを教育活動で実践したい。
- ◎今回の研修は今後に生かせる内容ばかりだったので、2学期からは子供たちにも楽しんで参加してもらえる授業づくりをしていきたい。ありがとうございました。
- ◎子供たちの「気付き」を演出する教材の工夫について勉強になった。
- ◎子供の視点に立った学習課題の提示について学ぶことができた。
- ◎どの研修も大変勉強になりました。今後の糧にしていきたい。

生成 AI が拓く教育の未来 授業における ICT 活用研修会 (生成 AI コース)

令和6年8月20日(火)に、生成 AI が教育にもたらす可能性と具体的な活用方法についての研修を行いました。

研修では、まず生成 AI が教育に変革をもたらす可能性について解説しました。生成 AI は、生徒一人一人の学習ニーズに合わせた個別指導を可能にするなど、教育の在り方そのものを変革する可能性を秘めています。

次に、ChatGPT、Copilot、Gemini といった代表的な生成 AI ツールを実際に体験していただきました。自動要約や翻訳機能、プログラミング支援、画像生成などを体験し、その精度の高さに参加者からは驚きの声が上がりました。

具体的な活用事例として、生徒の作文添削や外国語学習のサポート、プログラミング教育における補助ツールとしての活用などを紹介しました。また、生徒が主体的に学習を進めることができる個別最適化された学習環境を構築している事例も紹介し、新しい教育の形を提示しました。

さらに、生成 AI を効果的に活用するためのプロンプト(指示文)についても解説しました。指示を追加することで、生成 AI のアウトプットは大きく変わります。参加者は熱心にプロンプトを作成し、生成 AI の出力の変化を楽しみながら学びました。

一方で、生成 AI の利用には注意すべき点も存在します。誤情報の生成や偏見の助長、著作権侵害などの問題があることを説明し、生成 AI を安全かつ倫理的に活用するための心構えを共有しました。特に、情報リテラシーの重要性や、生成 AI が生成した情報には常に批判的な目で接する必要性を強調しました。

今回の研修を通じて、参加者が生成 AI の可能性を実感し、教育現場での活用に向けて意欲を高めていただけたことを嬉しく思います。生成 AI は、教育の未来を大きく変える可能性を秘めています。今後も総合教育センターでは、先生方が生成 AI を効果的に活用できるよう、研修や情報提供を行ってまいります。

(この文章は研修スライドから生成 AI が出力したものを元に作成しました。)



みんなが生きる(生きる)ためのチームづくりに必要なこと

～学校カウンセリング講座(みんなが生きるチーム支援コース)～

このコースは、児童生徒をとりまく関係性や援助資源を共有し、一人一人が持ち味を生かして役割を担う、機能するチームについて考える研修です。第1回は6月27日、第2回は8月21日に実施しました。今回は第2回の様子について紹介します。

- ◆講師 教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美
- ◆演題 「チームを組むために考えるこころの働き」
- ◆内容

午前の講義では、チームの力を発揮するには職員室に「心理的安全性が保障され、協同的風土があること」が大切である。そのため、日ごろから同僚と雑談等で関係をつくり、ちょっと困ったときに声をかけられる風土づくりが必要であることなどについての話を聴き、チームによる支援を考えた。

午後の演習では、子供を捉える視点はそれぞれの教師で違うことについて考えた後、エピソードプロセスを用いたケース会議を行った。



演習「エピソードプロセスを用いたケース会議」

受講者の声

◎今まで、職場の人に相談することは、仕事の手を止めさせてしまって気が引けるという気持ちが少なからずあったが、いろいろな人の視点から考えることは必要不可欠であると考えられるようになった。(小学校教諭)

「攻めの教育相談」を ～第2回生徒指導セミナー～

生徒指導における今日的な問題をテーマに、困難な状況にある児童生徒の理解と対応について考える「生徒指導セミナー(全4回)」について、今回は、7月26日に開催した第2回のセミナーを紹介いたします。

- ◆講師 上越教育大学大学院 教授
いじめ・生徒指導研究研修センター センター長 高橋 知己
- ◆演題 「いじめの理解と対応～子どものSOSに気付く・受け止める～」
- ◆内容

- 「他者との違いを楽しみ」と感じられない児童期・青年期の特徴がいじめの背景にある。
- いじめられている子供は「助けて」が言えない。大人側から子供の援助要請を聴きに行く「攻めの教育相談」が必要である。
- 子供は、自分の苦衷は自分からは告げにくいという心情に配慮し、いじめの早期発見のアンケートについて、タブレットを活用したり、SCT(文章完成法テスト)を用いたりするなどの工夫が必要。



講義の様子

受講者の声

◎アンケートやQ-U等を行ってはいるが、児童の本心は聞けていないのだと実感した。何かおかしいと感じたときには、教師から子供たちにコミュニケーションをとって困っていることに寄り添えるようにしたい。(小学校教諭)

みんなで学ぼう!特別支援教育コーディネーターの役割について!

学校で取り組む特別支援教育研修会～特別支援教育を担う教員の専門性の向上に向けて～(8月5日)

- ◆講師 午前:新潟大学 名誉教授 長澤 正樹
午後:西部教育事務所 小中学校巡回指導員 長井 久恵
- ◆演題 午前講義「特別支援教育を担う教員の専門性と指導力の向上」
午後講義・演習「特別支援教育の視点からみる関係機関および校内の連携の強化について」
- ◆対象 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の特別支援教育を担う教員(管理職、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級又は通級指導教室を担当する教員)や特別支援学校の特別支援教育コーディネーター又は地域支援担当者
- ◆内容

講義で、特別支援教育コーディネーターとしての校内における立ち位置、保護者対応、コンサルテーション、他機関との連携等、コーディネーターとしての役割や心構えについて学んだ後、架空事例を用いて模擬ケース会議を行い、子供の願いや思いを大切に、学校、保護者、関係機関等ができる支援について考えた。



演習「ケース会議で役割分担をしよう」

受講者の声

- ◎特別支援教育コーディネーターとしての役割、立ち位置がよく分かり、気軽に相談してもらえるように知識と技能を身に付けていきたいと思った。
- ◎模擬ケース会議では様々な立場の人からの意見を聞くことで、対象児童生徒を多角的に捉える大切さを感じた。

今、「教育の現代化運動」に学ぶこと

研修顧問 坪池 宏

日本教職員組合は、昭和28年に中学3年生を対象に学力調査（その前年に行われた中間調査を実施）を実施しています。その中から一部の問題と正答率を以下に示します。

	引き算	掛け算	割り算
分数と整数 (特殊)	$2 - \frac{2}{5}$ (47.2%)	$2\frac{5}{14} \times 7$ (28.8%)	$10 \div \frac{2}{5}$ (31.9%)
分数同士 (一般)	$1\frac{3}{5} - \frac{2}{5}$ (65.1%)	$3\frac{5}{9} \times 2\frac{1}{4}$ (45.9%)	$\frac{5}{8} \div \frac{5}{24}$ (54.3%)

この調査の対象が中学3年生であったことを考えると、正答率が全般的にかなり低く、戦後、アメリカ合衆国から入ってきた経験主義教育が児童の学力を低下させていることを立証するものとなりました。また、分数同士の計算より分数と整数まじりの計算の方が例外なく正答率が低いという意外な事実も明らかになりました。

遠山啓はこの結果から、それまでの特殊（分数と整数まじりの計算）の方が一般（分数同士の計算）よりやさしいという伝統的な考えを再検討し、「一般から特殊へ」を原則とし、暗算重視から筆算重視への転換、タイルを利用した指導（5のタイルにまとめ、2つの5のタイルをあわせて10のまとまりとする計算方法（52進法））を推進しました。これが「水道方式」の原点となります。「水道方式」は、抽象的な概念を具体的、視覚的に分かりやすく表したことから、高く評価され普及しました。今では、「水道方式」は、「演算方法にすぎない」という見方もありますが、戦後の算数数学教育に果たした功績は大きく、現在でも教科書の随所に「水道方式」の手法が取り入れられています。

一方、アメリカでも、スプートニクショック以降、経験主義教育による学力低下の反省から、科学教育を重視する「教育の現代化運動」が起こります。ブルーナーはその主導者であり、現象の一般的本質である「教科の構造」と、ある学習がその後の学習に影響を及ぼす「学習の転移性」を重視した指導を推進しました。

遠山とブルーナーの教育実践はそれぞれ独自に展開しましたが、類似点が多く、今でも教材を精選したり、配列したりする際の参考になります。

随想

聞 書

教育相談部長 北田 邦弘

自家用車で通勤しています。車内では、静かに好きな音楽を聞くことができ、それなりに充実感があります。しかし、往復2時間もあるので、時間をほかに使うことはできないか、と考えたとき、電車通勤の時に本を読んでいたことを思い出しました。

かつて、他の勤務地で片道1時間半ほどの電車通勤をしていたとき、待ち時間や車内では読書をしていました。寝ていることも多かったのですが、2年間でかなりの本を読むことができました。カバンには多くて3冊くらいしか入らないので、カバンの中にある本を、ある意味「仕方なく」読むことになり、家ではあまり読まないようなめんどくさい本も読めました。（例えば、メルヴィルの『白鯨』は、通勤途中に読みました。）今の通勤の車の中でも本が読めたなら…と思ったのですが、もちろん、信号待ちの時間だけでは読めないし、何より危ないです。

そうしたら、ありました。オーディオブックが。しかも、サブスクで。単行本1冊分くらいの月額を払うことで、20万冊もの本が聞き放題！朗読するのは有名な俳優やプロで、安心して聞くことができます。聞ける本はどんどん増えていきます。そして、これが大切なのですが、私の家に本が増えません。

再生時間が10時間程度の本なら、1日2時間の通勤時間で、1週間あれば聞くことができます。書店に平積みされている本など、話題になっているものや読んでみたいと思っていたものは、こうして車の中で聞くようになりました。

ただ、それが本を読むことと同じか、というと、やはり違うというのが実感です。オーディオブックという朗読を含めた音声による作品を聞くことによって、気に入った表現を読み返して味わったり、自分の過去のことを思い出したりという紙の本を読む喜びが、浮き彫りになったような気がしています。だから、今は紙の本の読書と、オーディオブックの「聞書」（こんな言葉はありません）、両方を楽しんでいます。音楽を聞く時間は減りましたが、この歳にして本との接し方が大きく広がりました。



Science
Cafe



科学館のある街を訪ねて ～イギリス・マンチェスター～

科学情報部 研究主事 横田 淳一

マンチェスターに、世界最初の列車が走った駅そのものを一部とした、巨大な科学産業博物館があります。その地下には、下水道やトイレの大変詳しい展示があります。なぜ下水道がここの大切な展示なのでしょう？

産業革命で多数の労働者を抱えたマンチェスターは、伝染病の発生など、世界で初めて衛生施設の問題に取り組んだ街だったのです。華々しさの裏では、こういった地味な問題の解決が必要だったのです。

マンチェスター市庁舎の玄関を入った所に、大きな像が置かれています。誰でしょうか？

歴代の市長ではありません。そこには、科学者ドルトンとその教え子ジュールの像が向かい合わせにあります。

ドルトンは物質を構成する最小の粒子「原子」を提唱し、近代原子論の父と呼ばれています。科学研究と同時に、個人教師（家庭教師）をマンチェスターで生涯続けました。1844年に亡くなったのですが、彼の遺体はこの市庁舎に安置され、4万人以上の市民が葬儀に参列しました。その晩年の教え子の一人がジュールです。

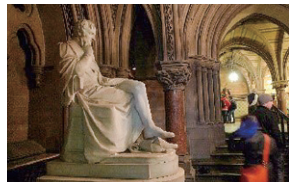
ジュールは、裕福な醸造所経営者の息子で、15歳からドルトンの個人教授を受けました。19歳で処女論文、23歳で「ジュールの法則」を発表。ジュールはドルトンに学んだだけで、一人前の物理学者に成長し、研究成果は長岡半太郎ら日本の物理学者にも受け継がれました。



Science + Industry Museum
最古の旅客列車駅



マンチェスター市庁舎
映画のロケ地としても有名



美しいゴシック建築の中に
原子論の父ドルトン像



向き合う弟子ジュール像
手には水攪拌摩擦熱量計

教育相談
コラム



自分の仮面はいくつありますか？



教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美

私たちは、様々な「顔」をもっています。例えば、「〇〇学校の教師」、「〇〇部の部長」、「親」、「妻や夫」等、私たちは、意識・無意識に関わらず、場面に合わせていわゆるキャラを使い分けています。つまり、「役割を演じている」わけです。これが、C.G.ユングが提唱した「ペルソナ」です。元々の意味は、古代ローマの古典劇において演者がつけていた「仮面」のことで、私たちは普段の生活の中で「仮面」をつけて暮らしているというのです。確かに、私も「仕事」「母親」「妻」「妹」等々、何役かの「ペルソナ」をつけ替えて生きています。ところで、昔々ジム・キャリーが主演した映画『マスク』をご存じですか？ 冴えない男が偶然に不思議な仮面を手に入れ、それをつけると超人的な力を持った黄緑色の顔の怪人「マスク」に大変身する物語です。そして、その仮面は簡単に剥がせず、人格も変わって大暴れするコメディ映画です。その内容は、「面白かった」と笑っただけでは終わらず、「同じようなことが現実でも起きているの

かも」と思わせるものでした。つまり、現実の世の中でも仮面がくっついて、剥がせず苦労したり、自分の本当の素顔が何だかわからなくなったりすることもあるのではないかということです。

仮面を自覚できていれば、さほど問題はありません。C.G.ユングが問題視しているのは、「舞台を離れてもその仮面を外せずにいる人」です。例えば、職場を離れた後も指導的であったり、家族にも部下を扱うような態度で接したりする人は、ペルソナとの関係に問題があるのかもしれない。「人間関係の辛さは、ペルソナに関係があるのかも」と気付いて自分の心に関心を向けてみると、くっついてしまっているペルソナに気付いて、剥がすことができるかもしれません。

C.G.ユングも、「自分に合った仮面をつけること」、「仮面を上手に着脱できるようになること」が大切であると説いています。舞台から降りたら素顔に戻る、時には自分のペルソナを観てみることも大事なのでしょう。